

解答

- ① 1 努力 2 利子 3 発芽 4 建てる 5 参考
 6 印刷 7 遊牧 8 争う 9 水辺 10 取材
- ② 問一 1 カ 2 ア 3 ウ 4 ク
 問二 1 ア 2 ウ 3 エ 4 イ
 問三 1 ○ 2 みかづき 3 ○ 4 ○ 5 そこちから
- ③ 問一 A イ B エ C ウ
 問二 1 ア 2 ウ
 問三 1 相手の足を止め 2 この車をおして行ってほしい
 問四 ア・オ (くんで不順可)
 問五 イ
 問六 いつも家にいるので、いろんな人と出会っておしゃべりできるのが楽しいから。
 問七 ア
- ④ 問一 1 I 動物の世話を真面目にしてくれる II 生命
 2 ウ
 問二 不器用で、
 問三 ものごとに対してあまり細かくこだわらない大らかな子。
 問四 ア
 問五 イ
 問六 ウ

解説

③ 出典は、^{しゅってん} 丘修三 ^{おかしゅうさう} 「口で歩く」 ^{こみねしょてん} 〈小峰書店〉。

問一 A…びっくりしている学生にタチバナさんが笑って話しかける様子なので「にっこり」があてはまります。「げらげら」は大声で笑う様子を表すので、ここにはあてはまりません。B…タチバナさんに「この車をおして行ってほしい」(32行め)と言われた青年ですが、どうするか悩んでいるようです。言いつらいことを言う様子なので、ここには「ぼそぼそ」があてはまります。C…断りきれずにタチバナさんのベッドを押すことになったので「しぶしぶ」があてはまります。

問二 青年は「えっ、な、なんだいこの人。こんなとこにねてるよ。いったい。何してるんだ?」(8・9行め)と思いました。ベッドが道路に置き去りにされたように見えたうえ、そこにねそべっている人がいるのですから、予想もしないことに驚きや戸惑いの気持ちがおこりますね。

問三 タチバナさんは自分では移動できませんから、どこに行くにせよ他人の手助けが必要です。そのためには自分の話を聞いてもらわなければなりません。そこで、通行人と目があった瞬間に大声であいさつをして、「相手の足を止め」てから、駅まで「この車をおして行ってほしい」とお願いするのです。

問四 「えっ、中央町!」(59行め)、「中央町は、だいぶ遠いですよ」(63・64行め)という言葉から、青年が驚いていることがわかりますね。自分ひとりでは移動できないタチバナさんが駅より遠い中央町まで行くことが信じられないし、驚いています。

問五 青年は浪人生でした。しかも二浪です。「正直いうと、おれ、必死なんです。もう、あとがないって感じで……」(81～83行め)と大学受験で追いつめられ、家族からのプレッシャーも感じ、辛い気持ちになっていることがわかります。タチバナさんは「五体満足でも」(84行め)大変なんだねと同情しているのです。

問六 タチバナさんは「いつも家にいるから、こんなときに、いろんな人とおしゃべりしたいんだ。いろんな人と出会えるって、楽しいじゃないか」(104～106行め)と理由を説明しています。タチバナさんの発言を上手にまとめてみましょう。一人で自由に出かけることの難しいタチバナさんは、ベッドを押してもらうことをきっかけにいろいろな人と出会い、道中のおしゃべりを楽しんでいます。

問七 青年はタチバナさんに、「会えてよかった」と感謝の気持ちを伝え、「ちょっと、落ちこんでたもんで」と理由を付け加えています。受験勉強に追いつめられ落ちこんでいたけれど、体の不自由なタチバナさんが人との出会いを大切に生きていく姿に感動し、勇気をもらって、自分もがんばって生きていこうと思ったのです。

④ 出典は、あさのあつこ「下野原光一くんについて」(ナツイチ製作委員会 編『あの日、君と Girls』〈集英社〉所収)。

問一 1…「飼育委員で、しかも相手が男の子なんて、最低、最悪だ」(7・8行め)とありますから、「光一くん」が男の子であること、そして男の子が「動物の世話を真面目にしてくれる」(8行め)わけではなく、「いいかげんで無責任」(12・13行め)だろうと考えたわたしはがっかりし、自分一人で「預けられた生命」(19行め)を守らなければならないと思ったのです。2…「がっかり」の同義語は「落胆」です。

問二 傍線部の「これ」の指す内容をさがします。「わたし」は周囲から「不器用で、生真面目で、融通がきかない。付き合い難い人だ、かわいげのない子だと言われて」(25～27行め)います。それを受け入れて、それでも「わたしはわたしを生きるしかない」(30行め)と「開き直ったように」(31行め)生きているのです。

問三 わたしが自分のことを「不器用で、生真面目で、融通がきかない」(25行め)子だと思っているのに、光一くんは「飄々としてるね」とわたしに言いました。光一くんは「飄々」について「大らかってことかなあ。あんまり、ごちゃごちゃだわらない、みたいな……感じ」(48・49行め)と説明しています。

問四 光一くんが自分のことを「飄々としてる」(37行め)＝「大らか」(48行め)と言ってくれたことに、「そんなことないよ」(50行め)と大声で否定しますが、自分で自分の声の大きさに驚き、さらに咳き込んでいます。わたしが思ってもいなかった光一くんの発言を聞き、驚きあわてていることがわかりますね。

問五 わたしが咳き込んでいると、光一くんは片手でわたしの背中を叩いて介抱してくれました。小学五年生になると、「男子と女子の距離が何となく開いていく時期」(62・63行め)、「距離の取り方をみんな、手探りしている時期」(63・64行め)なのです。それなのに光一くんが女子であるわたしの背中をあっさり叩いたことは不思議だと思ったのです。

問六 光一くんと話していると、これまで知らなかった光一くんのことが分かり「何て、おもしろい人だろう。何て、ヘンテコで愉快な人だろう」(81・82行め)と思いました。「どこか頑な」に生きていたわたしは、光一くんに来て話すことで肩の力が抜け、「心地よ」(87行め)い気持ちになったのです。